

『狭衣物語』作中歌の背景（四）

後藤，康文
宮崎大学教育学部助手

<https://doi.org/10.15017/10405>

出版情報：文献探究. 25, pp.63-75, 1990-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『狭衣物語』作中歌の背景

(四)

後藤 康文

本稿は、前稿注二にひきつづき、『狭衣物語』巻四の作中歌についてその背景にある先行歌を探ろうとするものである。調査の方針は前回までと同様であるが、作中歌の本文については校本未刊のため、便宜上目安となる形を掲げるとどめた。

* * *

いそげども行きもやられぬうき島を
いかでかあまのこぎはなれけん

古二三八
内一四四

出家をとどめられた狭衣の、夙に尼となった女二宮への贈歌。参考となる先行歌には、次のようなものがある。

水もなく舟もかよはぬこの島にいかでかあまのなまめかるらん
(『拾遺集』三六)

波だにも寄ることかたき浦島をいかでかあまのあるなしをしる
(『公任集』三七)

うき島をこぎはなれても行く方やいづくときまりとしらずもあるかな
(『源氏物語』玉鬘巻・兵部の君)

右三首のうちでは、就中『拾遺集』の歌が注目されようか。

いかばかり思ひこがれしあまならで
このうき島をたれかはなれん

古二三九
内一四五

先の狭衣の歌を心ならずも瞥見した女二宮は、胸中にこの一首を
吟く。これについても参考歌を三つほど挙げておきたい。

年を経て波立ちならすあまならで藻塩の草をたれかづくらん

(『大斎院前御集』三六)

いさやまたこのうき島にとまりなんしづみつつのみ世を経れば憂し
(『躬恒集』二五)

橋の小島の色はかはらじをこのうき舟を行方しられぬ

(『源氏物語』浮舟巻・浮舟)

はじめの一首、あるいは『狭衣物語』作者の脳裏にはつきりとあったのではないか。

神もなほもとの心をかへりみよ
この世とのみは思はざらん

古二四一
内一四七

堀川大殿は狭衣を俗世にとどめ置くための賀茂詣をするが、つき随った狭衣の心中は、この歌に見るごとく源氏宮内裏に溢れていた。特筆すべき事柄はないが、下句の類例としては、

あすしらぬ命なれどもちかひおかんこの世とのみは思はぬな
かを
(『能宣集』三二)

や、先後は不明だが、

しのびねはおとらじものを時鳥おのれのみとは思はざらん

(小弁・『万代集』五四)

待つ人は心ゆくとも住吉の里にとのみは思はざらん

(『大式三位集』壺)

などがある。

手になれしあふぎはそれと見えながら
涙にくもる色ぞことなる

古二四二
内一四八

女二宮のもとを訪れた狭衣は宮に逢えず、その移り香の染みついた扇を手にとって、片仮名書きに一首をしたためるのであったが、その第四句「涙にくもる」は、『源氏物語』や和泉式部の歌等にも見えているものの、源泉は、おそらく『拾遺集』大八(『中務集』二九・『信明集』二四)の中務の詠、

さやかに見るべき月をわれはただ涙にくもる折ぞおほかる
であると思われる。なお『狭衣物語』巻四には、同句を用いた歌がもうひとつ存在している。

恋ひてなく涙にくもる月影は宿る袖もや濡るる顔なる

一重つつにはひおこせよ八重桜
こち吹く風の便りすぐすな

古二四三
内一四九

堀川邸の八重桜を懐かしむ源氏宮の、前斎院後一条院女御への贈歌。この作の本歌は、諸注の指摘するとおり菅原道真の名歌、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれ
そ
(『拾遺集』二〇六・『大鏡』時平伝)

であるが、「こち吹く風」という形には、別に、

こほりにし氷室の池も冬ながらこち吹く風にとけやしぬらん

(「天慶二年賞之歌合」契・『夫木抄』二〇八)

のぼり舟こち吹く風をすぐすとてよをうしまとになげきてぞ
経る
(『好忠集』壺)

虫の音のかなしき野辺の花薄こち吹く風にうちなびかなん

(『重之集』二四)

などの先蹤が認められる。また、安法に次のような歌もある。

身はとめつ心はおくに山桜便りの風ににほひおこせよ

(『安法法師集』八〇)

散る花にさのみ心をとどめては
春よりのちはいか頼まん

古二五一
内一五七

狭衣が式部卿宮の姫君へ贈った歌「散りまがふ花に心をそへしよりひとかたならずもの思ふかな」に答えた母君の代詠。作者の念頭には、『古今集』六七の躬恒の歌、

君が思ひ雪とつもらば頼まれず春よりのちはあらじと思へば
もしくは『後撰集』二〇七の、

白雪のつもる思ひも頼まれず春よりのちはあらじと思へば
という作があったものと思われるが、そのほかに、坂上是則の一首、
花の色をうつしとどめよ鏡山春よりのちの影や見ゆると

も注意される。

のどかにも頼まざらん庭漚
影見ゆべくもあらぬながめを

古一五二
内一五八

春宮のもとで狭衣が目にした式部卿宮の姫君の歌である。この作の背景としては、『拾遺集』二函の、

世とともに雨降る宿の庭漚すまぬに影は見ゆるものかは
がもつとも有力だと考えられるが、ほかに参考となる先行歌には、
ながれてとなに頼むらん涙川影見ゆべくもおもほへなく

(『後撰集』全七)

つれづれにながむる宿の庭漚すまぬに見ゆる影もありけり

(『一条摂政御集』二函)

のどかにも頼まるるかな散りたたぬ花の都の桜と思へば

(『実方集』五)

などが挙げられようか。

いつまでとしらぬながめの庭漚
うたかたあはでわれぞ消ぬべき

古一五三
内一五九

先の姫君の歌に狭衣が答える。その第四句「うたかたあはで」の形成には、全書が指摘するように、『後撰集』五五(『古今六帖』二七六・『伊勢集』三〇四)の伊勢の作、

思ひかねたえずながるる水の泡のうたかた人にあはで消えぬ

や

が確かに関わっていると判断されるが、この一首以外にも、

庭漚行く方しらぬもの思ひにはかなき泡の消えぬべきかな

(『一条摂政御集』二函・『新勅撰集』三七)

庭漚木のもとことにながれずはうたかた人を泡と見ましや

(『兼輔集』三)

など、顧慮すべき歌がある。

水浅み隠れもはてぬ鳩鳥の
下にかよひし底も見じかは

古一五五
内一六一

式部卿宮邸から狭衣のもとに届いた返書を、「ものいひさがなき」
権大納言が目ざとく見とがめ、歌を詠みかけて擲掄する。全書や集成の指摘どおり、この歌の本歌は、『古今集』全二(『古今六帖』四三)の、

池にすむ名ををし鳥の水を浅み隠るとすれどあらはれにけり
と認めてよいが、と同時に、『古今集』全二では躬恒の作として、

冬の池にすむ鳩鳥のつれもなく底にかよふと人にしらすな

とあり、『後撰集』五三では、

冬の池にすむ鳩鳥のつれもなく下にかよはん人にしらすな
とある歌や、『古今六帖』二五二の、

君が名もわが名も立てじ池にすむ鳩といふ鳥の下にかよはん
なども、踏まえられているとみるべきかもしれない。

とりあつめまたもなき名を立てんとや

古一五六

うしやの岡に狩せしや君

内一六二

(『好忠集』五四)

権大納言に応酬する狭衣の歌である。『古今六帖』二四の、

あはぬ身ようしやの岡に狩はずれど名をだに立てぬ鳥にもあるかな

に拠る作であることは全書に詳しいが、もう一首、

こりずまにまたもなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にしす
まへば (『古今集』三三)

も関与しているものとみられる。なお、和泉式部には次のような歌がある。

野辺にいつる御狩の人にあらねどもとりあつめてそものはか
なしき (『和泉式部集』二五・三三)

あさましや浅間の山の煙には
立ちならぶべき思ひとも見ず

古二五八
内一六四

式部卿宮の北の方が娘に代って狭衣に宛てた返歌。初句及び第二句の措辞に影響した可能性をもつ先行歌には、およそ左のときがある。

雲晴れぬ浅間の山のあさましや人の心を見てこそやまめ

(平中興・『古今集』一〇五)

うらみてもしるしなけれど信濃なる浅間の山のあさましや君

(『古今六帖』八三)

信濃なる浅間の嶽のあさましや思ひくまなき君にもあるかな

(『順集』二七)

あさましや安積の沼の桜花霞こめても見せずもあるかな(注三)

われのみぞ憂きをもしらずぐしける
思ふ人だにそむきける世に

古二六〇
内一六六

病により出家した式部卿宮北の方を見舞う狭衣の、姫君への贈歌であるが、この詠作の根底には、『狭衣物語』中に幾度も引用されている『古今集』九五の、

世の憂き目見えぬ山路へ入らんには思ふ人こそほだしなりけれ

があると考えてよいのではなからうか。ほかに、

人ごとの憂きをもしらずありかせし昔ながらのわが身ともが
な (『後撰集』九二)

われのみや憂き世をしれるためしにて濡れそふ袖の名をくた
すべき (『源氏物語』夕霧巻・落葉宮)

あたりが参考となる。

われもまた益田の池のうきぬなは
ひとすちにやはくるしかりける

古二六二
内一六八

狭衣は病床の式部卿宮北の方に、母娘双方への恋の苦衷をほのめ
かす。諸注、『拾遺集』八四の、

ねぬなはのくるしかるらん人よりもわれぞ益田のいけるかひ
なき

に拠るとし、十分な判断である。ここでは蛇足ながら、類歌をいく

つか掲げておくこととする。

なきことをいはれの池のうきぬなはくるしきものは世にこそ
ありけれ

(『拾遺集』七二)

わが恋は益田の池のうきぬなはくるしくてのみ年を経るかな
(小弁・『後拾遺集』八三)
たちかはり益田の池のうきぬなはくれどもたえぬものにぞあ
りける

(『人麿集』二六)

思ひのみ益田の池のねぬなはのくるしやかかる恋の乱れは
(『能宣集』三三)

なげきわび寝ぬ夜の空にたるかな
心づくしの有明の月

古一六四
内一七〇

式部卿宮の姫君が叶わぬ恋の相手源氏宮に生写しであるのを見知つ
た狭衣の詠歌。まず下句には『古今集』一四の著名な一首、

木の問より漏りくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり
が意識されていよう。また、第二句「寝ぬ夜の空」の先蹤は、『実
方集』二六六の、

あやめ草寝ぬ夜の空の時鳥待つあけぼのの声を聞かばや
に認められ、『源氏物語』葵巻には、

なげきわび空に乱るるわがたまを結びとどめよしたがひの棲
という作も見える。ちなみに右の歌は、『狭衣物語』巻三の狭衣と
式部卿宮の中將とのやりとり、

あくがるるわがたましるもかへりなん思ふあたりに結びとど
めば

たましるのかよふあたりにあらずとも結びやせまししたがひ

の棲

に影を落としていた。

とけて寝ぬまろがまろ寝の草枕
ひと夜ばかりも露けきものを

古一六五
内一七一

一夜明けて、狭衣の式部卿宮の姫君に対する慕情はいや増す。こ
の詠については、第二句中の歌語「まろがまろ寝」の先例を指摘し
ておきたい。

夏草のしげみにおふるまろこすげまろがまろ寝よ幾夜経ぬら
ん

(『拾遺集』八元)

風の音もおどろかれまし夜もすがらまろがまろ寝に寝ならひ
にけり

(『和泉式部統集』四四)

草枕ひと夜ばかりのまろ寝にて
露のかごとをかけんとや思ふ

古一六六
内一七二

狭衣の「とけて寝ぬ」歌に応じた式部卿宮北の方の歌。倉又幸良
氏は、この作を、『源氏物語』夕霧巻の落葉宮の詠、

わけ行かん草葉の露をかごとにてなほ濡れ衣をかけんとや思
ふ

と同巻の母御息所の歌、

女郎花しをるる野辺をいづことてひと夜ばかりの宿をかりけ
ん

との合成であるとする(注三)。したがうべきであろう。ただし、「露

のかごと」という歌語は、やはり『源氏物語』夕顔巻の光源氏の詠、
ほのかにも軒端の萩を結ばずは露のかごとをなににかけまし
に見えている点にも注意しておきたい。

面影は身をもはなれずうちとけて
寝ぬ夜の夢は見るとなけれど

古一六八
内一七四

帰邸後も姫君の面影を忘れ得ぬ狭衣。この歌の初二句が、『源氏
物語』若紫巻の光源氏の詠、

面影は身をもはなれず山桜心のかぎりとめて来しかど

から取られていることは、諸注に明らかであるが、それとは別に、

『新古今集』所収の小野篁の歌（二二一）、

うちとけて寝ぬものゆゑに夢を見てもの思ひまさるころにも
あるかな

の影響も想定される（註）。

越えもせぬ関のこなたにまどひしや
逢坂山のかぎりなるらん

古一六九
内一七五

式部卿宮北の方死去。遺された姫君を思う狭衣の心中詠であるが、
これについては、参考歌を三首ほど挙げるにとどめる。

音羽山音に聞きつつ逢坂の関のこなたに年を経るかな

（『古今集』四三・『古今六帖』八五）

春雨に君をやりては逢坂の関のこなたに恋やわたらん

（『古今六帖』四三・『躬恒集』二九）

行く末の命もしらぬ別れ路はけふ逢坂やかぎりなるらん

（『拾遺集』三五・『能宣集』四三）

尋ね見るしるしの杉もまがひつつ
なほ神山に身やまどひなん

古一七七
内一八三

式部卿宮の姫君を迎えて幸福な日常を得た狭衣であったが、源氏
宮への思いは依然根深く、未練はなお絶ちがたいのだった。右狭衣
詠の大前提には、『古今集』六二の、

わが庵は三輪の山もと恋しくはとふらひ来ませ杉立てる門

があるのだろうが（諸注）、さらに、土岐武治氏も指摘しているよ
うに、『源氏物語』賢木巻の六条御息所の歌、

神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる櫓ぞ
も意識されていたかもしれない（註）。

おなじくは木高き枝に木つたはで
下枝の梅に来ゐる鶯

古一七八
内一八四

狭衣の姉でありかつ春宮の母でもある皇后宮より、式部卿宮の姫
君の一件を寓した歌が狭衣のもとに届く。第四句中の歌語「下枝の
梅」の先蹤は、

見るままに下枝の梅も散りはてぬきも待ちどほに咲く桜かな

（『和泉式部集』二〇・『風雅集』六）

都には下枝の梅も散りはててただかばかりの露やおくらん

（『増基法師集』二〇）

といった歌に見出せる。そのほか、

梅が枝に来ある鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ

(『古今集』五・『古今六帖』四〇二)

春來ぬとまつつけ顔に鶯の木高き枝にふりいでつつ鳴く

(『元真集』七)

なども参考にはなろうか。

ながむらん夕べの空にたなびかて

思ひのほかに煙立つころ

古二七九

内一八五

式部卿宮の姫君と安息の日々を送ることになるかに見えた狭衣であつたが、なお女二宮を忘れることはできず贈歌を試みる。この歌の基底には、『古今集』七八(『伊勢物語』百十二段)の、

須磨のあまの塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり
があるのではないかと考えられる。そのほか参考歌としては、『源氏物語』から二首を挙げておきたい。

見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきかな

(光源氏・夕顔卷)

ながむらんおなじ雲ゐをながむるは思ひもおなじ思ひなるらん
(明石入道・明石卷)

めぐりあはんかぎりだになき別れかな
空行く月のはてをしらねば

古二八一

内一八七

思いがけぬ受禪の決定に、源氏宮との隔絶は決定的となり、思い

あまつた狭衣は彼女のもとを訪れる。右はその折、夏の月影の中で至愛の人に捧げられた彼の絶唱である。この歌、『拾遺集』四〇(『伊勢物語』十一段)の、

忘るなよほどは雲ゐになりぬとも空行く月のめぐりあふまで
を本歌とするばかりか、その下句には、『後撰集』二〇、

思ひいづる時ぞかなしき世の中は空行く雲のはてをしらねば
の下句が、「雲」を「空」に変えたのみでそっくり取り用いられており、興味深い。

月だにもよそのむら雲へだてずは

よなよな袖にやどしても見ん

古二八二

内一八八

先の狭衣詠に和した源氏宮の歌。第二句中の「よそのむら雲」という歌語は、たとえば、

思ひやるよそのむら雲しぐれつつあだちの原はもみちしぬらん
(『重之集』六・『新古今集』二五二)

目にちかき折もありけりつねはなほよそのむら雲すぐるとぞ
見し
(『和泉式部統集』四七)

などの先行歌に見出せる。また、『源氏物語』梅枝巻には、

霞だに月と花とをへだてずはねぐらの鳥もほころびなまし
という弁少将の歌があり、あるいは参考となろうか。

七車つむともつきじ思ふにも
いふにもあまるわが恋草は

古二八三

内一八九

齋院からの帰途、道行く力車を見るにつけても狭衣の心は源氏宮
思慕でいっぱいになる。諸注の指摘どおり、この歌の本歌は『古今
六帖』四三（『万葉集』六七・『新勅撰集』三七）の広河女王の作、
恋草を力車に七車つみてもあまるわが心から

で決まりであるが、第三・第四句の措辞については別に、

思ふにもいふにもあまることなれや衣の珠のあらはるる日は

（伊勢大輔・『後拾遺集』二〇六）

思ふにもいふにもあまる深さにてことも心もおよばれぬかな

（『発心和歌集』七）

などからの摂取を想定すべきかもしれない。もっとも一方で、この
「思ふにもいふにもあまる」が、すでに和歌的慣用表現であった可
能性も高いように思われるが、いずれにせよこの表現は、『狭衣物
語』の地の文の中で二度にわたって用いられていたものである。

尋ぬべき草の原さへ霜枯れてたれに問はまし道芝の露

あきまじう行方なくたれとだに知らでやみにしは、なほ思ふ

にもいふにもあまる心地ぞし給ふや。

（日本古典全書上巻・巻二、二七九頁）

さし向かひて、とやかくやと、かたみに心の中をも聞えあは
する世なくて過ぎなほは、なほ思ふにもいふにもあまりて、
□惜しう心憂くおぼされけり。（同下巻・巻四、二四四頁）

恋ひてなく涙にくもる月影は
やどる袖もや濡るる顔なる

古一八四
内一九〇

晩秋の月の夜、狭衣は過日の思い出に堪えず、齋院に手紙を届け
させる。右狭衣詠の本歌は、次の伊勢の歌である（諸注）。

あひにあひてもの思ふころのわが袖にやどる月さへ濡るる顔
なる（『古今集』五・『後撰集』三三・『古今六帖』三〇他）
ただ、この作中歌には、思いなしか和泉式部のいくつかの詠作が影
響しているように感じられる。

恋ひてなく涙に影は見えたるを中川までもなにかわたらん

（『和泉式部集』四七・『榮花物語』衣の珠巻）

恋ひてなくねにだに寝ばや夢ならでいつかは君をまたは見
べき（『和泉式部統集』四二）

さやかにも人は見るらんわが目には涙にくもる宵の月影

（『和泉式部統集』三〇）

来りてもかひやなからんわれ見れば涙にくもる夏の夜の月

（『和泉式部統集』四二）

かく恋ひんものとしりてやかねてより

あふこと絶ゆと見て嘆きけん

古一八六
内一九二

式部卿宮の姫君は藤壺女御となつて入内するが、彼女が源氏宮と
瓜ふたつであるがゆえに、狭衣の心は乱れまざるのだった。この心
中詠の初二句には、左に列挙するごとく『万葉集』以来の類型が存
しているようである。

かく恋ひんものとしりせば夕べ起きて朝は消ぬる露ならまし
を（『万葉集』三〇・『後撰集』五二）

かく恋ひんものとしりせばわきもこに言問はましを今はくや
しく（『万葉集』三三）

かく恋ひんものとはわれも思ひにき心のうらそまさしかりけ
る（『古今集』七〇）

かく恋ひんものとしりせばひと目見る人に心をつくる身なれば
(『好忠集』五三)

ひきつれてけふはかざしあふひさへ
思ひもかけぬしめのほかな

古一八九
内一九五

賀茂の祭の日、懐旧に暮れる天皇狭衣の歌。右に關して土岐武治氏は、『源氏物語』須磨卷の右近將監の歌、

ひきつれてあふひかざししそのかみを思へばつらし賀茂の瑞垣

の影響を説いており(送)、妥当な見解だと思われる。さらに参考程度に一首付け加えるならば、和泉式部に、

ひきつれてけふは子の日の松にまたいま千歳をそのべにいでつる
(『和泉式部集』三・『後拾遺集』二五)

という作もある。

かなしさもあはれも君につきはてて
こはまた思ふものとしらぬを

古一九〇
内一九六

藤壺女御に皇子が誕生し、女二宮への恋着から兄若宮を不憫に思う狭衣の詠歌。初二句には、藤原伊尹の歌、

かなしさもあはれもたぐひおはかるを人にふるさぬ言の葉もかな
(『一条摂政御集』三・『新勅撰集』六九)

に先例があり、また『宇津保物語』には、
言の葉も涙も今はつきはててただつれづれとながめをぞする

といった作中歌もある。
(実忠・菊宴卷)

やしまる神も聞きけんあひも見ぬ
恋まされてふみそぎやはせし

古一九三
内一九九

賀茂行幸時の狭衣の歌。心は源氏宮へのついに叶わぬ恋の嗟嘆に満ちている。この歌、直接には卷三の狭衣の詠、

みそぎする八百万代の神も聞けわれこそ先に思ひそめしかに呼応するといえようが(大系)、その根底には、『古今集』吾一

(『伊勢物語』六十五段)の、
恋せじと御手洗川にせしみそぎ神は受けずもなりにけらしもが意識されていたであろう。なお、初二句の措辞については、『源氏物語』賢木卷の光源氏の歌、

やしまる国つ御神も心あらばあかぬ別れの中をことわれなどが参考となる。

神垣は杉の梢にあらねども
もみちの色もしるく見えけり

古一九四
内二〇〇

平野行幸の折、紅葉に彩られた齋院のあたりを遠望する右狭衣の独詠について、諸注、『古今集』九二の「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」を引き合いに出しており、この歌が発想の基盤となっているのは事実であるが、ここで注目したい一首は、『金葉集』五宅の藤原惟規の作、

神垣は木のまろ殿にあらねども名のりをせねば人とがめけりである。狭衣作者が「木のまろ殿」を「杉の梢」に入れ換えて、この先行歌の上句を利用した可能性は高いと考える。そのほか、参考歌としては、

おしなべてもみづる時は神垣の榊葉さへやしるく見えける

(『公任集』三二)

榊葉はもみちもせじを神垣の唐紅に見ゆるけさかな

(『大式三位集』二五)

神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる榊を

(『源氏物語』賢木巻・六条御息所)

などが挙げられる。

たちかへり下さわけどもいにしへの

野中の水は水草るにけり

古一九七

内二〇三

なお消えぬ狭衣の女二宮への恋心を察知した、藤壺中宮の怨み言である。従来、この作は『古今集』のふたつの歌、

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人を汲む

(『古今集』八七)

わが門の板井の清水里遠み人し汲まねば水草おひにけり

(『古今集』二五)

を合わせて形成されたものと説かれて来たが(諸注)、直前の散文部分、

とばかりものものたまはでうちながめさせ給ひて、「なほたちかへる心かな」と、御心にもあらず忍びやかに言はれさせ給ひぬるを、中宮はほの聞かせ給ひて、「なほもて離れ給ひ

つる御仲にはあらざりけり」と心得させ給ひて

(日本古典全書下巻・二七五頁)

に引かれたもうひとつの『古今集』貫之の歌、

いにしへになほたちかへる心かな恋しきことにもの忘れせで

(『古今集』三三・『古今六帖』三九七)

をも勘定に入れるべきであろう。

人しれぬ人江の沢にしる人も

なくなく着する鶴の毛衣

古二〇〇

内二〇六

飛鳥井女君の遺児一品宮が手に取った自らの産衣には、亡き母の子を思ふ遺詠が書きしるされていた。右の歌についてここで特筆しておきたいのは、次の一首である。

るいよりもひとりはなれてしる人もなくなく越えん死出の山路

路

(『和泉式部集』三八)

実はこの歌、『狭衣物語』巻三で狭衣が飛鳥井女君の法要を行なった夜、夢枕に立った彼女の霊が詠歌した直後の場面、

ありつる面影はただうつつにおぼえ給ひて見まはされ給ふを、人々は皆遠くのきつついとよく寝たり。ひとりつくづくと空をながめ給ひつつ、なくなく越ゆらん死出の山路までおぼしやらるるに

(日本古典全書下巻・一〇三頁)

においてすでに引歌として利用されていたものとおぼしく、「しる人もなくなく」ひとり死出の山路を越えて行く運命にあった飛鳥井女君が、「しる人もなくなく」わが子に「鶴の毛衣」を着せたのだという見事な照応を看取できるように思う。なお、『源氏物語』に左のごとき作中歌があることも付け加えておきたい。

なくなくも羽うち着する君なくはわれを巢守になるべかりけ
る
(中君・橋姫巻)

消えはてて煙は空にかすむとも
雲のけしきをわれとしらじな

古ナシ
内二二一

飛鳥井女君の遺詠。全書は、小野小町の歌、

はかなくて雲となりぬるものならばかすまん空をあはれとは
見よ
(『小町集』九)

を本歌と見ているが、その発想の基底には、むしろ『拾遺集』三三四の、

鳥辺山谷に煙の燃え立たばはかなく見えしわれとしらなん
が存在したのではなからうか。そのほか、「雲のけしき」の先蹤に
は和泉式部の作、

夕暮れは雲のけしきを見るからにながめじと思ふ心こそつけ
がある。

落ちたぎる涙の水脈は早けれど
すぎにし方にかへりやはする

古二〇五
内二二三

飛鳥井女君の遺詠に追和した狭衣の歌。その第二句に用いられた
「涙の水脈」は、『源氏物語』真木柱巻の玉鬘の詠、

三瀬川わたらぬ先にいかでなほ涙の水脈の泡と消えなん
に見える歌語である。参考歌としてはさらに、

天の川雲の水脈にて早ければ光とどめず月ぞながるる

(『古今集』八三)
涙川落つる水上早ければせきぞかねつる袖のしがらみ

(『拾遺集』八六・『古今六帖』二六三・『貫之集』五二)
いかにして数をしらまし落ちたぎつ滝の水脈より落つる白玉

(貫之・『古今六帖』一七五)
憂き目見しその折よりもけふはまたすぎにし方にかへる涙か

などを指摘できる。
(『源氏物語』絵合巻・光源氏)

消えはててかばねは灰になりぬとも
恋の煙は立ちも離れじ

古二〇七
内二二五

自らの諦め切れぬ心中を女二宮に直々に訴えた狭衣の歌である。
これについては、池田和臣氏が、『篁物語』(『玉葉集』五七)の、
消えはてて身こそは灰になるとても夢のたましる君にあひそ
へ

及び『源氏物語』柏木巻の柏木の詠、

行方なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ち離れじ

双方の影響を指摘しており(注)、したがいたい。ただひとつだけ付
言するならば、第四句中の歌語「恋の煙」は、やはり『源氏物語』
篝火巻の光源氏の歌、

篝火に立ちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬ炎なりけれ
に拠るものであると思われる。

たちかへり折らですぎ憂き女郎花

古二〇八

なほやすらはん霧の籬に

内二一六

女二宮に未練を残し、女郎花咲く嵯峨野の庭に立ちつくす狭衣。

その夕映えの姿を描いて『狭衣物語』は閉じられる。この歌の結句には、「霧のまぎれに」(古活字本等)など異文があるが、一首には元永本系『古今集』(『古今六帖』三六)所載形の忠岑の作、

人の見ることもやくるしき女郎花霧の籬に立ちかくるらん

が踏まえられていると考えられるため(注)、「霧の籬に」(内閣文庫本等)の本文を採るべきであろう。ちなみに、『為仲集』函には右の忠岑歌について、次のような逸話が残っている(注)。

東三条にて、殿(頼通)の「人の見ることもやくるしき

女郎花」といふ歌の末はおぼゆや」と問はせ給ひしに、

中宮の大和の君の家は北なれば、「いかがいふ」と問ひにやりたれば、「これこそおぼえね」といひて、しばしばかりありて、ものに書きて、「『霧の籬に立ちかくるらん』とこそいひけれ」といひおこせたりけり。はじめおぼえぬをはちむとて、

女郎花忘れ草と思ひつる霧の籬におそく晴るれば

そのほか、

散りまがふ花に心をそへしより
ひとかたならずもの思ふかな

古一五〇
内一五六

は、『古今六帖』三五〇の、

くちなしの色に心をそめしよりいはで心にものをこそ思へを、

くらべ見よ浅間の山の煙にも
たれか思ひのこがれまきと

古一五七
内一六三

は、『多武峰少将物語』三(『海人手古良集』五)の、

奥山の苔の衣にくらべみよいづれか露の置きはまきとを、

行きずりの花の折かと見るからに
すぎにし春ぞいとど恋しき

古一七五
内一八一

は、『風葉集』所載(四)の『朝倉物語』の作中歌、

よそへつつ折りける梅の花見ればすぎにし春ぞいとど恋しきを、それぞれ念頭に置いた作と思われる。

また、以下の諸歌については個別に参考歌を掲げておく。

柳葉になほ折りかへよ桜花
またそのかみのわが身と思はん

古一四五
内一五一

とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はん
(『源氏釈』所引古歌)

折り見ばや朽木の桜行きずりに
あかぬにはひは盛りなりやと

古一四九
内一五五

道の辺の朽木の柳春くればあはれ昔と忘れぞする

(道真・『新古今集』四九・『和漢朗詠集』二〇)

片敷きにかきぬ衣うちかへし
思へばなにを恋ふる心ぞ

古二七〇
内一七六

うちかへし思へばかなし煙にも立ちおくれたる天の羽衣

(『和泉式部統集』三)

うちかへし思へばあやし小夜衣このへ着つつたれを恋ふらん
(『実方集』三三)

憂かりけるわが中山のちぎりかな
越えずはなににあひ見そめけん

古二七一
内一七七

はるかにぞ思ひやらるうとからぬわが中山の松の梢に

(『元輔集』癸)

おくれじとちぎらざりせば今はとて
そむくもなにかかなしからまし

古二〇三
内二〇九

命だに心にかなふものならばなにか別れのかなしからまし
(『古今集』三七・『和漢朗詠集』四〇・『大和物語』二四段)

かすめよな思ひ消えなん煙にも
立ちおくれてはくゆらざらまし

古二〇四
内二二二

うちかへし思へばかなし煙にも立ちおくれたる天の羽衣

(『和泉式部統集』三)

すぎにけるかたを見るだにかなしきに
絵にかきとめて別れぬるかな

古二〇六
内二二四

すぎにけるかたぞかなしき君を見て明かし暮らしを月日と思へば
(『和泉式部集』四〇)

注

- (一) 「狭衣物語」作中歌の背景(一)〜(三) (文献探究二二〜二四)
- (二) この歌、『夫木抄』にも採られているが(一三六五)、本文は「あさましや安積の山の桜花霞こめても見えずもあるかな」と少異がある。
- (三) 「狭衣物語」の形成をめぐる(新編大学国文学会誌、昭六二・三)
- (四) 「算物語」ではこの一首、「うちとけぬものゆる夢を見て覚えてあかぬもの思ふころにもあるかな」とあり、かなり異なっている。
- (五) 「狭衣物語の研究」(昭五七、風間書房)、五一六〜五一七頁
- (六) 注五書、五三五〜五三七頁
- (七) 「狭衣物語の修辭機構と表現主体」(国語と国文学、昭六一・三)
- (八) 狭衣詠直前の物語本文、
御前の花盛りに咲き乱れて、夕露おもたげにてひとときわたしたる色々、いづれともなく見おきがたき中にも、女郎花の、人の見るとやくるしからん、霧の絶え間わりなげなる気色にて立ち隠れたるは、なほいとすぎがたくおぼしめさる。(全書、二九二〜二九三頁)の引歌として諸注は、通行定家本系「古今集」二三五の歌本文(第四句「秋霧にのみ」)を挙げるが、狭衣詠との兼ねあいからして、元永本・基俊本などの「古今集」もしくは「古今六帖」所載の歌型(第四句「霧の籬に」)を採るべきであろう。
- (九) 石井文夫著『橋為仲集全釈』(昭六二、笠間書院)、一二〇〜一二三頁参照。
- (十) 樋口芳麻呂著『平安・鎌倉時代散逸物語の研究』(昭五七、ひたく書房)一二三頁に、両者類似の指摘がある。